

9月9日ゼミは開催します

9月は会場の都合で、第2土曜日の9日となります。当日の時間割は、ゼミ講演が約2時間で、残り1時間半は7月に引き続き世話人会(幹事会)を行います。尚、世話人会には、会員の皆さんも参加できます。世話人会の議題は下記の通りです。

記

- 1、2022年(7月～6月)収支について
- 2、2024年のツアーについて
- 3、2024年以降の年会費について
- 4、2024年以降のゼミの運営について

以上

北海道のオホーツク文化・トビニタイ文化

—9月9日ゼミ紹介文:倉重 千穂会員記—

「オホーツク文化」とは

日本の古代を中心とする時期(5～12世紀)、厳冬期には流氷が大半を埋め尽くす所、それを中心とした周辺地域から北海道、そしてオホーツク海をめぐる地域に異民族による全く別の文化が花を咲かせたのである。これが「オホーツク文化」である。

この文化の担い手であるオホーツク人は大陸のアムール河流域の人々と関りが深く、また中国の唐王朝にも朝貢していたとみられる。彼らは擦文人とは異なる寒冷地適応の形質的特徴をもっており、現在サハリンに住む先住民ニヴフの祖先と考えられている。

オホーツク海沿岸にオホーツク文化とよばれる古代文化の遺跡が分布しているが他に日本海沿岸にもいくつか分布している。

オホーツク文化の特徴は以下の3点。

- ① 北海道からみて外来の文化である。網走のモヨロ貝塚などで多くの人骨が発見され、オホーツク人がどのような顔かたちをしていたかが明らかになっている。
- ② 海獣・狩猟や漁労など海での生業を生活の基盤と

する海洋民の文化である。北海道内のオホーツク文化の遺跡は全て海岸の近くに存在しており、そこに形成された貝塚などからアザラシ、トド、オットセイなどの海獣、クジラそして様々な魚の骨などが大量に出土している。

- ③ 堅穴住居の内部にクマの頭骨を積み上げた祭壇(骨塚)を設けたり、動物を表現した骨角製品や土製品が多くみられる。

多角形の大型住居、生業、死者を送る葬送儀礼と動物儀礼、オホーツク文化独特の信仰、世界観の表現など。

続縄文人は古墳文化の鉄器を求めて東北北部に南下していたが、これと同時にサハリンのオホーツク人も北海道に南下を開始した。

渡海してきたオホーツク人は稚内など道北の沿岸部に集落を構えるが、その後、道東のオホーツク沿岸へ領域を拡大、続縄文人と北海道を二分する。

オホーツク人が何故北海道に南下したのか定説はないが、彼らは古墳社会の人々との交易を求め、日本海側の奥尻島から津軽海峡を回り込み、東北北部の交易拠点を訪れていた。

興味深いのが道南の奥尻島で青苗砂丘遺跡が見つかり、この遺跡で5～8世紀頃のオホーツク文化の住居や墓が発見されている。オホーツク人は道北日本海の利尻、礼文などの島々やオホーツク北部沿岸(稚内等)に拠点を置きながら、しばしば日本海を南下、6世紀頃の続縄文土器には本州の土師器とオホーツク土器の両方の影響がうかがえる。

6世紀のオホーツク人の本州進出にともなって、道北や道東のオホーツク人の遺跡では6世紀以降、直刀など本州の鉄器が出土している。

しかし、オホーツク人が古墳社会との交易を求め、道南の領域に進出したことは、両者の緊張を高めることになった。

注目されるのは王権の行った北方遠征である。『日

本書紀』の斉明紀にある、律令政府の役人である阿倍比羅夫が200艘の船団を率いて日本海を北上、大河の流れ込む海岸で渡島蝦夷(続縄文人)と肅慎(オホーツク人)の争いに遭遇、渡島蝦夷から助けを求められ、肅慎と戦ったとされるものである。

比羅夫が戦利品として持ちかえった70枚もの大量のヒグマの毛皮はオホーツク人が交易のため東北北部の交易拠点に持参したものであろうか。比羅夫のオホーツク人討伐は彼らの交易活動を阻害することになり、続縄文人と東北北部の人々との間で行われていた交易を王権の管理下に置くことが目的だったと考えられる。

興味深いことに奥尻島のオホーツク人の集落は、比羅夫の遠征と同時に姿を消してしまった。交易をめぐる対立や競合のあったオホーツク人は、交易民として成長を目指す擦文時代のアイヌの祖先(擦文人)によって排除されていくことになる。

9世紀末には、それまで道央以西にいた擦文人はオホーツク人が占めていた道北と道東へ進出していく。彼らはまず、内陸では石狩川中流域の空知平野北端と上川盆地、さらに日本海を伝って北海道北端の稚内まで北上、各地に集落を設ける。道北のオホーツク人の拠点である稚内、礼文島、利尻島では数百年維持してきた伝統的な集落を放棄し西海岸の元地などに後退し、擦文文化の影響を被りながら、なおしばらく姿をとどめた。

道東地区ではやや遅く、擦文人の圧力をうけてオホーツク人は斜里-根室・釧路-千島地域に後退した。この段階を「トビニタイ文化」とよんでいる。

トビニタイ文化は9世紀~13世紀まで北海道東部にあり、擦文文化の影響を受け、海岸から離れた内陸部にも展開した。知床半島の羅臼町トビニタイ遺跡で出土した土器が、擦文土器の形とオホーツク土器の文様をもっており、これをトビニタイ土器と呼んだことが由来となっている。

トビニタイ土器を製作した人たちはどのような生活の跡を残しているのだろうか。土器を作り始める9~10世紀頃には段丘上に移動し、さらに海から数十kmも河川を遡る内陸部にも遺跡を残すようになる。オホーツク文化は海洋重視の遺跡立地だが、トビニタイ土器を使用する時期には、陸上や河川の資源を意識した地点に多く遺跡が形成されるようになり、その生業は大きく変化したと考えられる。

9~10世紀頃には、擦文人がオホーツク人を数の上で圧倒するという状況ではなかったか。

オホーツク文化の遺跡は、北海道では現在200カ所確認されている。ほぼ全てが海岸線から1km以内の地点に立地し、遺跡からは周辺地域の文化からもたらされた外来の遺物が出土。本州系遺物もある。

紹介文は「オホーツク文化」の流れや人々の交流について簡単に説明したが、ゼミでは、代表的遺跡を中心にオホーツク人の社会、住居や暮らし、生業、そして、常に社会的に重要な位置を占めていた「死」に伴う墓・葬送儀礼、またオホーツク文化独特の信仰・世界観であるクマを中心とする動物儀礼などについても説明する。

以上

ゼミ・世話人会会場と時間

13:15~16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR水道橋駅東口(お茶の水寄り)下車徒歩2分。
- 3、都営三田線水道橋駅下車、A1出口は長い上り階段。エレベーター利用のA3出口が便利。
- 4、電話番号:03-3816-4196

東南アジアと日本

—齊藤 潔 会員記—

2023年6月17日から23日迄、令和天皇と皇后がインドネシアをご訪問された。この訪問の中で、天皇はジャワ島中部の仏教遺跡「ボロブドゥール寺院」を視察された。今回、このボロブドゥール寺院の歴史を知って、予て東南アジア(インドネシア等のスンダ列島地域、比島やインドシナ半島地域)と日本との共通点を探索し、両地域は歴史上も深い関係にあったのではとないかと推測していた私にとっては、背中を押された思いであった。その共通点を下記に述べてみたいと思う。

共通点は3点ある。第1は「基壇」、第2は「鳥装人物」、そして第3は「神話」である。

以下で、上記3点を順番に説明したいと思う。

- 1、「基壇」は、「毎日新聞6月21日夕刊(ジャカルタ高島博之記者)」の記事が詳しいので、要点を紹介する。インドネシアのジャワ島中部にあるボロブドゥール寺院は、8~9Cに一帶を治めた王朝が建設したとされる。丘に土を盛り、整形した石を積み上げて約120m四方の建物を支える基壇の上に、5層の方形壇、更に3層の円形壇が載る階段状ピラミッド構造をしている。日本でも仏塔として数少ないが階段状ピラミッドが存在する。代表格は東大寺の南1kmにある「頭塔ズトウ(国史跡・奈良市)」の名称で、約32m四方の基壇

に石や土で7段の方形壇が築かれている。高さは10mで767年の築造とされる。頭塔の謂われは、権力僧で左遷先の九州で死んだ玄昉の頭を埋めた伝承による。2つ目は、同じく8Cの建立で、「土塔トウ(国史跡・堺市)」の名称で、約53m四方の基壇に12層の方形壇と、1層の円形壇を重ねたもので、行基が建造したとされる。3つ目は、「熊山遺跡(国史跡・岡山県赤磐市)」の名称で、約12m四方の基壇に3層の石積みとなされ、2層目に仏龕が設けられている。

ボロブドゥール寺院のような仏塔の日本以外の他地域への影響は、東南アジアで数例、朝鮮半島南部で4例確認されているが、インドや中国には無いとされる(東南アジア考古学の坂井隆・台湾大学元教授の論文「古代における仏塔の伝播—ボロブドゥールと奈良頭塔の関係について—2008年」)。ボロブドゥール寺院や頭塔に表現される密教的思想はインド起源で、2つのルートで中国に伝わり日本へ至った。1つは玄奘三蔵(602~664年)が辿った中央アジア経由の陸路、2つはインドネシア等東南アジア経由ルートの海路で中国僧義浄(635~713年)らが往来した。

坂井元教授は、「インドネシアではボロブドゥール寺院以前から、山岳信仰に由来する石積みの建造物が作られていた。密教等が広がる過程でインドネシアでは、在来の石積み建造物を使ってボロブドゥール寺院が建設され、日本には設計思想が伝わった」と考える。

752年の東大寺の大仏開眼供養では、736年に遣唐使の帰国船で来日したインド出身の菩提僊那が導師を務め、ベトナム出身の仏哲が舞楽を奉納している。当時の日本は、国際色豊かな文化環境下にあったのである。インドネシア出身の僧が来日して、仏塔の設計思想を伝えたと想像するのも可能であろう。

2、次に「鳥装人物」に移ろう。日本では弥生土器に描かれた人物が全国に10例程あるが、その内、鳥装人物が描かれた4例(清水風遺跡・新庄尾上遺跡・稲吉角田遺跡・東町遺跡)の土器絵画を順に紹介する。

①清水風遺跡は、奈良県の唐古・鍵遺跡の北600mにあるBC1世紀の遺跡である。絵には、頭に羽飾りをつけてマント状のものを纏い、両手を上げた鳥装人物が甕の破片に描かれていた。この人物は女性でシャーマンと見なされている。この遺跡は、唐古・鍵遺跡とは異なり、祭祀に使用されたと思われる遺物が多数出土し、日常生活に必要なものは殆ど出土しないので、祭場だったと推定されている。

②新庄尾上遺跡は、岡山市にある弥生中期後半の遺跡である。土器に描かれた人物にはクチバシと頭にトサカ状の装飾があり、マント状のものを纏い両手を上げた鳥装人物を表現している。この人物もシャーマンと見なされる。

③稲吉角田遺跡は、米子市にある弥生中期の遺跡である。壺の頸部に線刻によってゴンドラのような舟上に、頭に羽飾りをつけた4人の鳥装人物が描かれている。その内の一人の羽飾りは他の人物のそれより大きく描かれている。この絵の他に、六重の同心円(太陽か?)、建物2棟、木に下がった2個の銅鐸?そして動物等が描かれている。

④東町遺跡は長野市にある2000年前の遺跡である。壺には、頭に羽飾りをつけて右手に戈を持った鳥装人物で戦士を想像される。

以上が、鳥装人物の4例である。特徴は、2000年前頃の土器絵画である事、羽飾り又はトサカ状のものが頭に付けている事、描かれた人物は、シャーマン、船の漕ぎ手、そして戦士と多彩である。

⑤海外の鳥装人物はどうであろうか。

①まずは中国の『山海経』(戦国期から漢代までに成立した地誌書)に記述がある。同書では羽民、羽民人の名称で、中国に伝わる伝説上の人種として紹介されている。彼らは、中国の南方の「南山」の東南に住み、その姿は鳥のくちばし、赤い眼、背中の両肩に羽毛が生えていると記されている。

②次は、ドンソン文化に注目したい。ドンソンの名称はベトナム北部のタインホアの北4kmのドンソン遺跡に由来する。ドンソン文化の分布は、中国南部、東北タイ、マレー半島、インドシナ、インドネシアに及ぶ。この遺跡の代表的出土遺物の銅鼓には、ゴンドラのような舟に乗船した巨大な羽飾りを頭の後ろに付けた多数の鳥装人物が多数のゴンドラと共に描かれている。その姿は、鳥取県の稲吉角田遺跡の土器絵画に酷似している。この乗船風景は、相互にインドネシア、中国や日本間を航海していた事を想像させる。

③次に、インドネシアに目を向けると、カリマンタン島(旧ボルネオ)のダヤク族やスラウェシ島(旧セレベス)のミナハサ族には、今でも羽飾りを頭の後ろに付けた戦士や首長が存在する。又、北米のネイティブインディアンも頭に羽飾りを付けている事も、忘れずに記しておきたい。

上記の内外の鳥装人物を、想像をたくましくして述べ

れば、彼らは日本列島と東南アジア、インドネシアを航海し、日本に到着した人物の中には、戦士やシャーマンになり、列島中部から西日本に展開していたということになるのか。この航海は弥生時代からなのか、又は、それ以前の時代からなのかは不明だ。次に、神話の世界に入ろう。

4、2つの神話

インドネシアと日本で共通した代表的神話は、テーマが、「人間の生命の有限さ」と「食べ物が女性の死体から生まれた」とする物語である。

①人間の生命の有限さはインドネシアでは、「バナナ型神話」として語られる。日本での神話は『記紀』に登場するニニギの結婚譚である。

インドネシアの神話は、スラウェシ(セレベス・約18万km²)島に伝わる神話である。初め天と地の間は近く、人間は、創造神が縄に結んで天空から垂し下してくれる贈物によって命をつないでいたが、ある日、創造神は石を下した。我々の最初の父母は、「この石をどうしたらよいのか？何か他のものを下さい」と神に叫んだ。神は石を引き上げてバナナを代りに下してきた。我々の最初の父母は走りよってバナナを食べた。すると天から声があって、「お前たちはバナナを選んだから、お前たちの生命はバナナの生命のようになるだろう。バナナの木が子供を持つ時には、親の木は死んでしまう。そのようにお前たちは死に、お前たちの子供たちがその地位を占めるだろう。もしもお前たちが石を選んだならば、お前たちの生命は石の生命のように不変不死であったらう」と語った(大林太良『日本神話の起源』)。

一方、『記紀』神話では、アマテラスの命令を受けて地上世界に降臨したニニギノミコトが、オオヤマズミに娘をほしいと話した。父神のオオヤマズミは、姉のイワナガヒメと妹のコノハナサクヤヒメの2人の娘を差し出した。しかし、ニニギは醜いイワナガヒメを送り返し、美しいコノハナサクヤヒメとだけ結婚した。父のオオヤマズミはこれを怒り、「私が娘二人を一緒に差し上げたのは、イワナガヒメを妻にすればニニギの命は岩のように永遠のものになるはずであったのに、コノハナサクヤヒメのみを妻にしたため、木の花が咲き誇るように繁栄はするだろうが、その命ははかないものになるだろう」と語った。

人類がバナナと花を選んだからその生命が有限になったとは、ホモサピエンスらしい物語である。

さて、私のもう一つの関心は、この神話で共通して語られる永遠の生命の象徴として何故、石が語られたのかである。人類は出アフリカ以来、生きる為の道具として石器と共にあった。石器は万能の道具として、長い移動の旅と生活・生命を支えた。この長い石器時代の体験が、石こそ永遠の生命の象徴として子孫に伝えたのではないかと解釈したいと思う。

②次は、死んだ女性から食べ物が生じるという「死体化生神話」、「食物起源神話」である。

これもインドネシアのセラム島(セレベス島の東・約2万km²)生まれである。この神話は「ハイヌウェレ神話」と呼ばれる。ココヤシの花から生まれたハイヌウェレという少女は、様々な宝物を大便として排出することができた。ある時、踊りを舞いながらその宝物を村人に配ったところ、村人たちは気味悪がって彼女を生き埋めにして殺してしまった。ハイヌウェレの父親は、掘り出した死体を切り刻んであちこちに埋めた。すると彼女の死体からは様々な種類の芋が発生し、人々の主食となった(『世界神話事典』)。

さて、日本の『古事記』の神話では、高天原を追放されたスサノヲが、空腹を覚えてオオゲツヒメに食物を求め、オオゲツヒメは様々な食物をスサノヲに与えた。それを不審に思ったスサノヲが食事の用意をするオオゲツヒメの様子をみると、オオゲツヒメは鼻や口、尻から食材を取り出しそれを調理していた。スサノヲは、そんな汚い物を食べさせていたのかと怒り、オオゲツヒメを殺してしまった。すると、オオゲツヒメの頭から蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれた。一方、『日本書紀』では、登場神がスサノヲからツクヨミに、オオゲツヒメからウケモチヒメに夫々変わっているが、話の筋はほぼ同様で、五穀がウケモチヒメの体の部分から誕生する物語になっている。この神話のモチーフは、東南アジア、オセアニア、南北アメリカにも広がっている。

この2つのテーマの神話は、インドネシア神話の内容が素朴で、記紀神話には修飾が見られる事から、記紀神話の方が新しいように思う。その伝播者は、東南アジアからの民であろう。その時期は、縄文期の形成を担った3万数千年前に日本列島に渡来したホモ・サピエンスの時代ではないかと思われる。了

次回10月7日ゼミ・テーマ

次新しい騎馬民族説の証明・バージョン II

一槌田 鉄男会員